

このまま町のにぎわいがなくなるのを見ているだけでいいのか

ひかわボタニカルマーケットが始まったのは平成30年。例年3月3日と4日は、宮原振興局前から宮原小学校までの区間に、植木や花の苗木の業者や飲食など多くの出店が並ぶ「初市」が春の大きなイベントとしてにぎわいを見せていました。しかし、植木を扱う業者の減少やホームセンターの増加といった影響を受け出店者も来場者も減り、かつての活気をなくしていました。氷川町商工会青年部は、当時初市の出店者でした。変わっていく初市の姿を見ながら、長年の出店者や毎年楽しみに来てくれる人たちがいる中で、このまま廃れさせてもいいのかという思いが高まったと言います。いろいろな業種が集まる自分たちが知恵を絞って昔のように活気溢れるイベントができないか、こうして商工会青年部が中心となり、新しいイベントが動き出しました。イベント名も「ひかわボタニカルマーケット」に刷新。ハンドメイドや自然素材な

どの出店を意図的に増やすなど、他のイベントとの差別化も狙いました。初市が新しいイベントに生まれ変わったというニュースは話題を呼び、当日会場には多くの人が押し寄せました。新しいにぎわいの誕生は、多くの人に町のこれからを期待させる新しい風となりました。ひかわボタニカルマーケットは今回で開催も6回目となり、「ボタマ」の愛称もすっかり定着してきました。開催のたびに町内外から多くの人が訪れ、今や町を代表する大きなイベントの1つとなっています。その年のボタマの内容は、実行委員長・副実行委員長を中心に、毎年ゼロから検討されます。今回の準備も6月から始まり、毎週水曜日の夜にそれぞれの仕事が終わってから集まり、深夜まで議論が続くことも少なくありませんでした。ボタマ終了後、今回の振り返りと今後について、話を聞きました。



(※)

特集 もっと喜ぶ顔が見たい!「ボタマ」を続ける理由 第6回ひかわボタニカルマーケット開催

